

# 検査室における治療前訪問の有用性の検討

## —パンフレットを用いた治療前訪問を実施して—

中央放射線部

○山 中 和 美 手 島 真理子

宇 野 紀 子 横 山 百合子

### 1. はじめに

中央放射線部では、検査だけでなく様々な治療が行われている。その大半は、侵襲の少ない局所麻酔下でのカテーテル治療である。

昨年ステントグラフト留置術施行患者の治療前・治療中の不安、苦痛について調査を行い、治療に臨む患者が、「治療は上手くいくか」「痛くないか」などの不安を持ち、検査部門看護師による治療前訪問を望んでいることが分かった。私達は、患者にとって治療前訪問が治療の理解を深め、安心を与える効果があるのではないかと考えた。そこで治療時間が比較的長時間で症例数も増加している治療に対して、パンフレットを用いた治療前訪問を実施し、有用であるかを検討した。

### 2. 研究方法

#### 1) 用語の定義

治療前訪問：予定治療の前日、患者に治療や麻酔に関する情報提供を行い、質問に対し説明をする事を意味する。(以下、訪問とする)

#### 2) 対象・期間

期間：平成16年5月13日から10月6日

対象：平成16年8月2日から10月5日の間に骨盤・下肢動脈血管拡張術を受けた入院患者男性 14名(初回・再治療を含む)とした。

患者にはこの研究の主旨及び不利益を与えないことを説明し同意を得た。

#### 3) 方法

##### (1) 患者アンケートを作成

不安については、どのようなことに不安をどの程度感じているのかを知るために時間や痛み、造影剤の副作用などの12項目(以下アンケート①とする)のアンケートを作成した。訪問については、看護師

の訪問が有用なのかを知るために、「説明は十分であったか」「訪問はあった方が良かったか」などの8項目(以下アンケート②とする)、パンフレットについてはパンフレットを用いることが良かったかを知るために、「読みやすかったか」「見やすかったか」などの7項目(以下アンケート③とする)についてのアンケートを作成した。アンケートの回答は『全く思わない』から『はっきりそう思う』の4段階で1点から4点の得点で測定した。

##### (2) 研究手順

治療前後の訪問と治療中に立ち会う看護師を研究者4名とし、患者の情報を統一して得られる情報収集用紙を作成した。

治療前日にアンケート①を行った後、私達が作成したパンフレットを用いて治療室に入室してから退室までの経過を説明した。説明後、再度アンケート①を行った。治療翌日に訪問し、アンケート②③を行った。

##### (3) 分析方法

アンケート①については、患者14名をA群(治療経験あり)：7名、B群(治療経験なし)：7名に分けて、12質問項目の説明前後の、回答点数の平均値と標準偏差を測定した。また、12質問項目の説明前後の比較はウィルコクソン順位和検定を用いて測定した。

アンケート②③については、回答点数の平均値と標準偏差を測定した。

### 3. 結果及び考察

年齢層は55～80歳で、平均年齢は70.6±6.93歳であった。アンケート回収率は100%であった。アンケート①の結果(図1,2)より、ウィルコクソン順位和検定を行うと、説明前後でそれぞれの項

目 ( $p > 0.05$ ) に、不安の変化の有意差はみられなかった。

山賀らは、<sup>1)</sup>「ある患者は『予告』されることによって緊張が緩和し安心するが、他の患者は『予告』によってかえって不安が増長され緊張を高めることになる」と述べている。

A群は説明後、点数が低く ( $0.24 \pm 0.19$ ) なっていたのは9項目あり、B群は説明後、点数が高く ( $0.285 \pm 0.14$ ) なっていたのは8項目あった。A群は過去に治療の経験があったことが反映され、B群は訪問で初めて情報を得たことで、不安が増強したからではないかと考える。

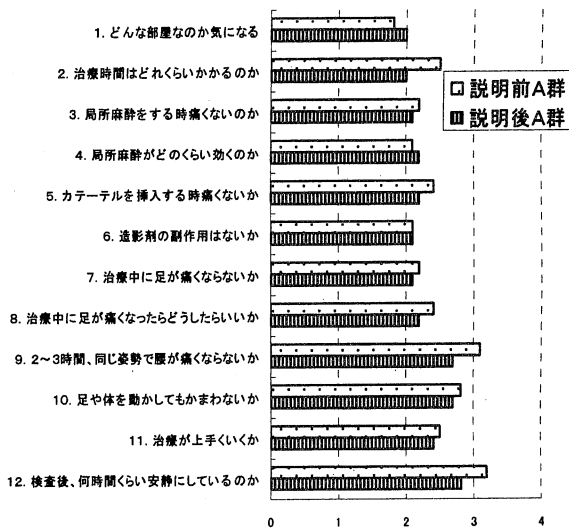


図1. A群の説明前後のアンケート①の結果

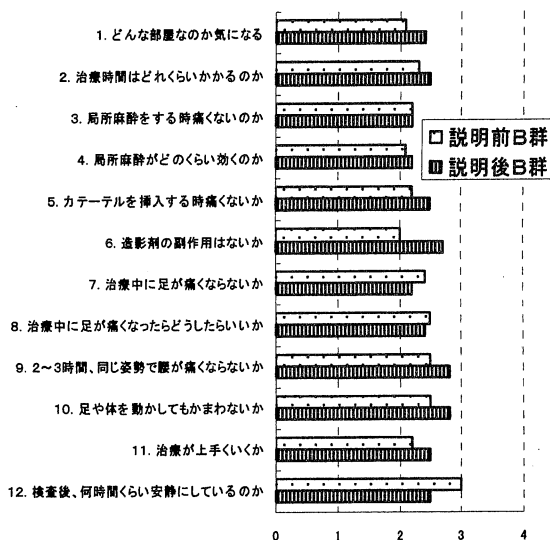


図2. B群の説明前後のアンケート①の結果

アンケート②の結果(図3)は、全項目で  $3.4 \pm 0.7$  点以上であった。その中でも「治療前の看護師の訪問があって良かった」「看護師の訪問はあった方が良いと思う」の項目で高い点数を示した。これは、患者が訪問を望み支持する結果だと考える。訪問があったことで、「治療のことがよくわかった」「不安がなくなった」「安心して治療を受けられた」の項目においても高い点数を示した。このことから訪問での説明により、治療については理解しやすく、不安なことをその場で聞くことができたことで、安心できたのではないかと考える。

永田らは<sup>2)</sup>「術前患者は、手術室看護婦が単に不十分な説明を補うのではなく、説明を含めた面接によって安心したいと望んでいる。」と述べている。

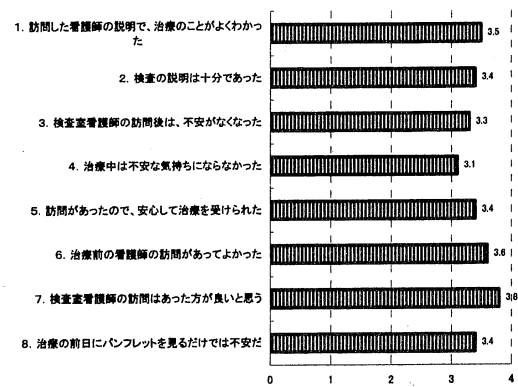


図3. アンケート②の結果

アンケート③(図4)の結果は、全項目で  $3.3 \pm 0.7$  点以上であり、良い結果が得られた。これは、パンフレットが訪問の説明をより理解しやすくするための効果的な方法だったと考える。

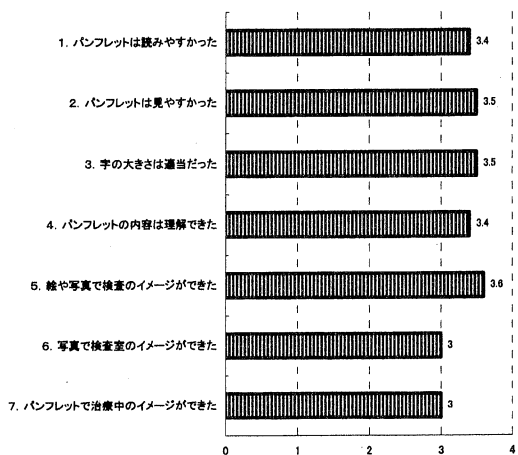


図4. アンケート③の結果

#### 4. まとめ

不安については、説明前後での有意差はみられなかったが、患者の不安に訪問が影響することは示唆された。そして説明を行い直接不安や質問に対して答えるという関わりが、私達が考えていたように、患者の治療に対する理解を深め、安心を与える効果を得られた。このことから、訪問が患者にとって有用と言える。

割石は<sup>4)</sup>「術前訪問を実施しないで看護を行う場合は、何を基盤にして行動しているのかが問われる。個別情報がなく患者との面識がなければ、ベッドの工夫や急な術式の変更などの予測はできない。さらには患者の不安な思いを深く理解できないことになる。看護には患者の個別情報は欠かせないことであり、対象を理解することは看護の基本である。」と述べている。

今回の訪問を通して、私達は患者の情報を事前に得ていること、面識があることで、個々の患者に合わせた看護を行うことができたと感じた。

このように感じたことから、治療前訪問は検査室看護師にとっても、看護する上で重要であると考えられる。

#### (引用文献)

- 1) 山賀邦子：危機的状況にある手術患者とのコミュニケーション，OPEnursing' 99 春季増刊，p83 - 89, 1999.
- 2) 永田まなみ他：術前訪問時に患者が望む手術室看護，第24回日本看護学会集録（成人看護I），日本看護協会出版会，p 85 - 87, 1993.
- 3) 割石富美子：周手術期看護における術前・術後訪問の意義，OPEnursing' 99 春季増刊，6 - 12, 1999.